

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

## 英語学習意欲喪失の要因と英語の好き・嫌いとの関係

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2023-09-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 津村, 修志, TSUMURA, Shuji メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/2000354">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/2000354</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



# 英語学習意欲喪失の要因と英語の好き・嫌いとの関係

津 村 修 志

1. はじめに
2. 方法
  2. 1. 調査時期と対象
  2. 2. 手続き
3. 結果と考察
4. 結び

## 1. はじめに

動機付けが、語学学習の成否に大きく関わることは疑いようもない。強い動機があつてこそ学習者は努力を惜しまない。語学学習においては、自らをその言葉を使用する場面に置かなければならない。そこで多くの失敗を繰り返すことになるだろう。だが、やる気があればそのような壁も乗り越えられるにちがいない。乗り越えることができれば学習の成功は時間の問題であり、また、学習者をそこまで導くことが教員にとっての成功と云っていいだろう。今日まで動機付けの研究が数多く行われてきたのも、学習継続への強い影響力故である。

「動機付けができる」、つまり「やる気にさせる方法を知っている」ことは、教員にとって必要不可欠な資質であることには異論なからう。初めて外国語に触れる学習者に対しては、学習の動機付けこそが、学習への導入時だけでなく、その後の授業運営にもかかわる。だが、一般の大学生は、すでに中学と高校で英語学習を経験しており、中には当初語学学習に対する意欲を持っていながら何らかの理由でそれを失ってしまったという者もいる。そうした学生をやる気にさせるには、意欲を失った、または持っていない原因を知ることも重要である。意欲の喪失は放置しておけば語学嫌いを招くことは十分考えられる。現在、語学を嫌う学生の数の増加は、深刻な問題である。実際、本学学生506名に対して行ったアンケートでは、英語が「嫌い」と答えた学生が132名(26.0%)、「どちらかという嫌い」は215名(42.4%)、「どちらかという好き」は115名(22.7%)、「好き」と答えた学生はわずかに43名(8.5%)であった(無回答1名)。嫌いなものに対して意欲を感じないのはごく自然なことだが、学生の多くにとっては履修が求められている科目でもある。「嫌い」では済まされない。だから、意欲喪失の原因を探り、「嫌い」という意識を変えて行かなければなら

い。

学習意欲喪失に関する代表的な研究の1つは Dornyei (2001) によって1998年 Budapest で行われた。彼は、実際に意欲低下を経験したことのある Secondary school の生徒50人に10分から30分のインタビューを行い、以下の9つの意欲低下要因を見出している。

1) 教員の性格、献身度、能力、教え方、2) 不適切な学校設備や授業運営法(クラスサイズ、レベル、頻繁な教員の入れ替わりなどを含む)、3) 自信喪失(失敗した経験と、成功体験の不足)、4) 第2言語に対する否定的な態度、5) 第2言語学習が必修であること、6) 他の外国語学習の干渉、7) 第2言語社会に対する否定的な態度、8) グループメンバーの態度、9) 教科書、である。この内教員に関わる要因が最大であったという。ただし、彼が行ったインタビュー形式の調査では、被験者は研究者の質問に即座に回答することが求められたため、過去の意欲低下体験が十分に引き出せたかどうかについては疑問が残る。

最近のものでは、Trang, T. T. R., & Baldauf, R. B. (2007) による、英語を外国語として学ぶベトナム人学生100人を対象とした研究がある。彼らは、被験者にエッセイを書かせ、その回答から意欲喪失の要因を48見出している。エッセイでは三つの質問、「英語を学ぶ中で意欲を失った経験はありますか。またそれはどうしてですか」、「現在、英語学習は好きですか。どのようにして英語学習への興味を取り戻したのですか。あるいは取り戻すことができませんでしたか」、「意欲の喪失をできるだけ少なくするにはどうすればいいと思いますか」に対する回答が求められた。彼らは被験者の回答から、意欲喪失要因を内発的要因と外発的要因に分類している。前者をさらに、英語に対する態度、失敗の経験と成功体験の欠如、自尊感情に関わるものに分け、後者を教員に関わるもの、学習環境に由来するもの、その他としている。彼らの調査では、外発的要因が意欲喪失体験の64%を占め、その中でも教員に関わる要因が全体の38%であったという。教員に関わる要因はさらに、教員の態度、教員の能力、教え方、評価方法に細分化され、その中で教え方が全体の26%でもっとも大きな要因であった。

上の研究はいずれも、意欲喪失最大の要因が教員に関わるものとしているが、それはすべての場合において当てはまるだろうか。彼らの研究は海外で行われているが、日本の大学生が対象であっても同様の結果が出たであろうか。また、英語学習を好む者と好まない者でも結果は同じであろうか。大学全入時代を迎え、学力低下が深刻化し、それでもほとんどの学生が語学を必修科目として履修する我が国の大学語学授業は、他の国のものと比べてやや特殊である。たとえば、英語で授業が行われることは少なく、学生同士が英語を使ってコミュニケーション活動を行うことも多いとは言えない。また、大半の授業が教員中心で、教員が話すのを学生が聞いている割合が多いと考えられる。さらに、高校では英語の授業をまともに受けてないと言う学生までいる。このような状況では、意欲喪失要因も上の研究の結果とは異なると考えるのが自然ではないだろうか。

もう1つの問題点は、我が国の大学生の調査に対する態度である。インタビューを行えば、緊張してしまう。自由記述式の回答を求めると短い答えしか書いてくれない。選択式の質問紙を使えば最後まで回答してくれるが、研究者が想定した範囲でしか情報を得ることができない。このように1つの方法ではどうしても十分なデータが得られないと考えられる。

本研究は自由記述による予備調査をもとに、選択式の質問を42項目作成し、集めたデータを探索的因子分析にかけて日本人大学生の意欲喪失要因について調査を行った。自由記述の質問紙と選択式の質問項目を併用することで、両者の欠点を補えると考えたためである。さらに、英語が《好き》な被験者と《嫌い》な被験者で各要因がどのように異なるかを調査した。これらの検討を通して、大学生の英語学習に対する意欲喪失要因とその特徴を明らかにしていくことが本研究の目的である。

先行研究には、「意欲低下」ということばも見受けられる。厳密に区別すれば、意欲がまったくなくなれば「喪失」、まだ少しでも残っているなら「低下」ということになるだろうが、日常の用法において「意欲低下」も「意欲喪失」も同様に「やる気を失う」という意味で使われているようだ。また、始めから意欲があったのかなかったのかは厳密に区別されることは少ないだろうと推測する。したがって、以降「意欲喪失」という表現を使用する。

## 2. 方法

### 2.1. 調査時期と対象

2007年5月、予備調査として関西の短期大学1年生30名(非外国語専攻、男子1名、女子29名)を対象として、「これまでやる気がなくなった・下がったという経験をしたことがありますか。もしあれば、具体的に教えてください。また、そのような経験がないという人は、どのようなことであなたのやる気が失われると思うか想像で教えてください」という質問に自由記述で回答してもらった。いずれの回答も文章数は1、2文程度であったが、未記入はなかった。

予備調査の回答をもとに42の選択式質問紙項目を作成した(Appendix 参照)。その際 Dornyei (2001, pp 152-153) を参考にしたが、探索的に要因を抽出するのが目的であったため、先行研究の結果をもとにバランスよく質問項目を配置するのではなく、予備調査結果を優先して項目を作成した。その後、余った紙面には先行研究を参考に質問項目を追加した。ただし、表現方法や言葉の選択は本研究独自のものである。調査は、2008年および2009年の5月から6月にかけて行った。関西の4年制大学4校で286名(男子164名、女子122名)、短期大学1校で59名(男子22名、女子37名)、合計345名(いずれも非外国語専攻)に回答を依頼した。短期大学学生は39名が1年生、19名が2年生、4年制大学学生は175名が1年生、46名が2年生、41名が3年生、23名が4年生、1名がその他であった。

回答は無記名・任意とし、成績には一切影響しないことを伝え、回収後、未記入のもの、すべて同じ数字に印を付けているもの、最後まで回答していないものを除外した。上記の合計が、有効回答数である。また、実際に項目のような経験がある場合は各自の経験に基いて回答すること、そして経験がない場合は、「もし項目のようなことが起こったら」と仮定して回答するように依頼した。もし経験したことだけを選ばせた場合、「めったに起こらない」項目に対して出現頻度は小さくなり、「よくあること」に対して頻度が大きくなることは当然である。頻度も重要度を測る1つの基準であるが、各項目のようなことが実際に発生した際に、どのくらいの潜在的な影響力があるかを見ることが望ましいと考えた。

## 2.2. 手続き

まず、質問項目について項目分析を行った。各質問項目に対して7件法により回答してもらいスケールをそのまま得点として平均値を算出した。たとえば、「全然そう思わない」は1点、「強くそう思う」は7点である。各項目の平均値と標準偏差はTable 1に示す通りである。平均値 $\pm$ 1標準偏差を算出し最小値・最大値を超える項目がないこと、さらに得点分布に偏りがいいことを確認したので42項目すべてを使って因子分析(主因子解、プロマックス回転)を実施した。

Table 1: 質問紙項目の記述統計量

No.	項 目	平 均	標 準 偏 差
1	試験が難しかったとき	4.496	1.955
2	覚えることが多すぎると感じたとき	5.180	1.820
3	学習する目的がわからないとき	4.872	2.015
4	クラスの雰囲気が悪いとき	4.390	1.997
5	教員に対する信頼を失ったとき	5.055	1.820
6	英語を使う場面がないと感じたとき	3.709	2.005
7	文法が難しいと感じたとき	4.687	1.902
8	試験が簡単過ぎたとき	2.487	1.641
9	授業が難しかったとき	4.656	1.844
10	教科書や教材の値段が高いと思ったとき	3.765	2.010
11	上達しているかどうかわからないとき	4.767	1.744
12	どうしてもテストで良い点が取れないとき	4.988	1.719
13	発音がうまくできなかったとき	3.771	1.805
14	教師の教え方が悪いと感じたとき	5.015	1.880
15	質問に対して満足できる答えが得られなかったとき	4.503	1.799
16	授業が簡単過ぎたとき	2.881	1.676
17	教師におこられたとき	3.481	1.897
18	良い成績がもらえなかったとき	4.249	1.781
19	英語を話そうと思っても、うまく言葉が出てこなかったとき	3.951	1.915
20	勉強する方法がわからないとき	4.974	1.693
21	欠席や遅刻をしてしまったとき	3.084	1.847
22	他の人(友達)が英語学習に対する意欲をなくしてしまったのを見聞きしたとき	2.977	1.773
23	自分は日本人だから、英語は必要ないと思ったとき	2.919	2.020
24	授業の内容に疑問を持ったとき(こんなことして本当に役に立つのかと思ったとき)	4.310	1.994
25	宿題が多すぎたとき	4.545	1.849
26	英語以外の勉強の方が大切だと思ったとき	4.226	1.970
27	毎日忙しくて、英語を学習する時間がないと思ったとき	4.507	1.790
28	外国人や外国の文化に興味を持てないと思ったとき	3.259	1.826
29	英語を話す人で、どうも好きになれない人に会ったとき	2.735	1.742
30	辞書を引くのが面倒だと思ったとき	3.858	1.879

No.	項 目	平 均	標 準 偏 差
32	間違って恥ずかしい思いをしたとき	3.429	1.832
33	前で発表させられるなど、緊張したとき	3.757	1.998
34	勉強しなくても誰からも怒られないと思ったとき	2.983	1.672
35	使える英語を学ぶには、お金がかかると思ったとき	3.509	1.902
36	結局、留学でもしないと英語は身に付かないと思ったとき	4.000	1.982
37	英語を話している自分に違和感を感じたとき	3.119	1.688
38	一緒にがんばれる友達がいなくて	3.328	1.842
39	教室の環境が悪い(暑い、寒い、狭いなど)と思ったとき	3.851	1.977
40	教師の態度が学生によって違うと思ったとき	4.583	2.095
41	教科書がつまらないと思ったとき	4.602	1.854
42	他の人の成績(テストの結果)が自分のものより良かったとき	3.064	1.811

### 3. 結果と考察

一回目の因子分析の結果、固有値1以上の因子が10個認められたが、固有値の減衰状況から7因子構造と考えられた。そこで、抽出する因子数を変えて分析を繰り返し、結果を比較検討した。もっとも単純構造に近く、因子解釈の容易さを考慮して7因子を抽出することが適当であると判断した。複数の因子で比較的大きな負荷量を示した項目15、17、22、25、27、29、31、38を除いて再度因子分析(主因子解、プロマックス回転)を行った結果をTable 2に示す。

第1因子は、「文法が難しいと感じたとき」、「試験が難しかったとき」、「覚えることが多すぎると感じたとき」、「授業が難しかったとき」などの項目で高い因子負荷を示しているの、何らかの困難と関わりがあると考え、「困難・能力の壁」と命名する。

第2因子は、「教員に対する信頼を失ったとき」、「教師の教え方が悪いと感じたとき」、「教師の態度が学生によって違うと思ったとき」などの項目で高く負荷しているの、「教師の態度」と深く関わっていることがわかるが、「クラスの雰囲気が悪いとき」、「教室の環境が悪い(暑い、寒い、狭いなど)と思ったとき」、「教科書がつまらないと思ったとき」などの項目も含まれているので、教師の影響に加えて学習者が置かれている環境に要因があることがうかがえる。したがってこの因子を「教師・環境」と名付けることにする。

第3因子については、「間違って恥ずかしい思いをしたとき」、「前で発表させられるなど、緊張したとき」、「英語を話そうと思っても、うまく言葉が出てこなかったとき」といった項目が含まれていることから、恥ずかしい経験や緊張することを嫌う学習者の気持ちを読み取ることができる。また、「他の人の成績(テストの結果)が自分のものより良かったとき」という項目は、自尊心が傷つくことを恐れていることと何か関係があるのではないだろうか。これらの解釈から、この因子を「自尊感情防衛」と呼ぶことにする。

第4因子は、「自分は日本人だから、英語は必要ないと思ったとき」、「英語を使う場面がないと感じたとき」、「授業の内容に疑問を持ったとき(こんなことして本当に役に立つのか

Table 2: 意欲喪失要因因子分析結果

番号	項 目	I	II	III	IV	V	VI	VII
7	文法が難しいと感じたとき	<b>.829</b>	-.210	-.141	-.001	.057	-.119	.212
1	試験が難しかったとき	<b>.784</b>	.056	-.005	.024	-.206	-.127	.163
2	覚えることが多すぎると感じたとき	<b>.766</b>	.091	-.075	.050	-.129	-.180	.129
9	授業が難しかったとき	<b>.711</b>	.034	.049	-.089	-.034	.029	.170
12	どうしてもテストで良い点が取れないとき	<b>.646</b>	.012	.117	.029	-.082	.045	-.251
18	良い成績がもらえなかったとき	<b>.464</b>	.102	.229	-.020	-.062	.139	.021
11	上達しているかどうかわからないとき	<b>.415</b>	-.062	-.087	.038	.127	.310	-.238
20	勉強する方法がわからないとき	<b>.414</b>	.037	.035	.127	.078	-.031	-.003
5	教員に対する信頼を失ったとき	.042	<b>.789</b>	-.110	.037	-.055	-.096	-.047
4	クラスの雰囲気が悪いとき	-.003	<b>.681</b>	.030	-.006	-.134	.108	-.036
14	教師の教え方が悪いと感じたとき	.158	<b>.652</b>	-.119	-.015	.036	-.023	.036
40	教師の態度が学生によって違うと思ったとき	-.046	<b>.572</b>	.136	-.044	.088	.001	.164
39	教室の環境が悪い(暑い、寒い、狭いなど)と思ったとき	-.181	<b>.505</b>	.181	.066	.047	.019	.029
41	教科書がつまらないと思ったとき	.021	<b>.373</b>	-.064	-.018	.352	.043	.116
33	前で発表させられるなど、緊張したとき	-.009	.016	<b>.892</b>	.050	-.215	-.064	.039
32	間違っって恥ずかしい思いをしたとき	-.014	-.014	<b>.861</b>	-.042	-.013	-.116	.030
42	他の人の成績(テストの結果)が自分のものより良かったとき	.018	.018	<b>.410</b>	.017	.163	.052	.256
19	英語を話そうと思っても、うまく言葉が出てこなかったとき	.294	-.053	<b>.399</b>	-.062	.120	-.011	.043
23	自分は日本人だから、英語は必要ないと思ったとき	.154	-.222	.116	<b>.594</b>	-.054	.006	.070
6	英語を使う場面がないと感じたとき	.034	-.063	-.127	<b>.577</b>	.118	.147	-.049
24	授業の内容に疑問を持ったとき(こんなことして本当に役に立つのかと思ったとき)	-.046	.192	.057	<b>.564</b>	.054	-.131	-.036
28	外国人や外国の文化に興味を持てないと思ったとき	-.091	-.099	.215	<b>.561</b>	-.032	.095	.150
26	英語以外の勉強の方が大切だと思ったとき	-.030	.132	-.059	<b>.511</b>	.127	-.134	.106
3	学習する目的がわからないとき	.096	.219	-.159	<b>.505</b>	-.105	.048	-.095
36	結局、留学でもしないと英語は身に付かないと思ったとき	-.174	-.032	-.163	.071	<b>.912</b>	-.183	.045
35	使える英語を学ぶには、お金がかかると思ったとき	-.073	.027	.002	-.030	<b>.635</b>	.139	.175
37	英語を話している自分に違和感を感じたとき	.074	-.028	.177	.048	<b>.487</b>	-.038	.110

番号	項目	I	II	III	IV	V	VI	VII
13	発音がうまくできなかったとき	.166	.034	.246	-.004	<b>.352</b>	-.112	-.217
16	授業が簡単過ぎたとき	-.128	.109	-.017	-.032	-.165	<b>.824</b>	.232
8	試験が簡単過ぎたとき	-.138	-.116	-.156	.049	-.051	<b>.788</b>	.256
10	教科書や教材の値段が高いと思ったとき	.165	.079	.032	-.015	.151	<b>.356</b>	-.080
30	辞書を引くのが面倒だと思ったとき	.401	.002	-.039	-.038	.179	.049	<b>.483</b>
34	勉強しなくても誰からも怒られないと思ったとき	.036	-.017	.109	.096	.047	.242	<b>.476</b>
21	欠席や遅刻をしてしまったとき	.107	.140	.055	-.009	.006	.272	<b>.394</b>
	因子間相関	I	II	III	IV	V	VI	VII
	I		.276	.486	.452	.517	.124	-.149
	II		-	.204	.304	.343	.243	-.045
	III			-	.352	.579	.353	.075
	IV				-	.516	.220	.071
	V					-	.449	.037
	VI						-	-.184
	VII							-

と思ったとき)、 「外国人や外国の文化に興味を持てないと思ったとき」、 「英語以外の勉強の方が大切だと思ったとき」、 「学習する目的がわからないとき」 の6項目から構成されている。いずれも、英語学習の必要性を否定・または見失っている場合のコメントと考えられるので、この因子を「必要性・目的不明」と命名する。

第5因子には、「結局、留学でもしないと英語は身に付かないと思ったとき」、 「使える英語を学ぶには、お金がかかると思ったとき」、 「英語を話している自分に違和感を感じたとき」という項目が見られることから、回答者が英語の学習に現実味を感じていないことがうかがえる。「発音がうまくできなかったとき」という項目は、一見「困難・能力の壁」のようであるが、英語を実際に口に出すことに対して、何らかの抵抗を感じているとも考えられる。それはおそらく、英語を話す自分をあたかも別世界の人格ととらえているようでもある。したがって、この因子を「現実味欠如」と呼ぶことにする。

第6因子は、「授業が簡単過ぎたとき」、 「試験が簡単過ぎたとき」で高く負荷していることから、「達成感・充実感欠如」とする。残り1項目は「教科書や教材の値段が高いと思ったとき」であるが、それほど高く負荷していないので、上記2項目から因子の解釈を行った。ただし、教材の値段についてコメントするという事は、「それだけの投資に値しない」という見方もできるので、「投資に値するほどの達成感・充実感が得られない」という不満の表れとも解釈できる。つまり、3項目とも何らかの関連があると推測できる。

第7因子については、「辞書を引くのが面倒だと思ったとき」、 「勉強しなくても誰からも怒られないと思ったとき」、 「欠席や遅刻をしてしまったとき」という項目が見られる。「勉強しなくても誰からも怒られないと思ったとき」は、「誰からも怒られないなら面倒なことはやりたくない」という気持ちが読み取れる。また、「欠席や遅刻」は授業に対する怠慢、



自分への甘えともとれる。このような考え方は、学習しなければならないと知りながら、何らかの理由を付けては努力をしないことを正当化しているようにうかがえる。そこでこの因子を「努力回避」と名付ける。ただし、「欠席や遅刻」は意欲喪失の要因ではなく、結果である可能性もあるため、後の解釈は慎重でありたい。

上の結果から、意欲喪失要因の下位尺度を構成すると、「困難・能力の壁」の下位尺度は8項目、「教師・環境」は6項目、「自尊感情防衛」は4項目、「必要性・目的不明」は6項目、「現実味欠如」は4項目、「達成感・充実感欠如」と「努力回避」は3項目となる。 $\alpha$ 係数を用いて、各因子の内部一貫性を検討したところ「困難・能力の壁」は.833、「教師・環境」は.777、「自尊感情防衛」.763、「必要性・目的不明」.744、「現実味欠如」.706、「達成感・充実感欠如」.593、「努力回避」は.554、であった。「達成感・充実感欠如」と「努力回避」は低い値であるが、ともに3項目であることを考えると十分な値であると判断する。

次に、質問紙において英語が「好き」、「どちらかという好き」と回答した被験者129名を《好き》グループとし、「嫌い」、「どちらかという嫌い」と回答した者115名を《嫌い》グループとした。「どちらでもない」と回答した者はこの後の分析には含めていない。Table 3には、上記のグループ別に意欲喪失要因の得点に差が見られるかどうかについて、t検定を行った結果を示す。

Table 3: 意欲喪失要因各下位尺度得点のグループ別比較

	《好き》グループ (n=129)		《嫌い》グループ (n=115)		t 値	有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
困難・能力の壁	-0.472	0.918	0.460	0.858	-8.159**	.000
教師・環境	0.050	0.923	-0.074	0.985	1.015	.311
自尊感情防衛	-0.200	0.930	0.173	0.909	-3.156**	.002
必要性・目的不明	-0.240	0.856	0.300	0.929	-4.727**	.000
現実味欠如	-0.183	0.958	0.189	0.874	-3.159**	.002
達成感・充実感欠如	0.164	0.925	-0.172	0.761	3.075**	.002
努力回避	-0.057	0.854	0.018	0.744	-.727	.468

\*p &lt; .05, \*\*p &lt; .01 自由度242

Table 3から「教師・環境」「努力回避」以外のすべてについて《好き》グループと《嫌い》グループで有意な差が認められる。「困難・能力の壁」、「自尊感情防衛」、「必要性・目的不明」、「現実味欠如」については《嫌い》グループが高い平均値を示し、「達成感・充実感欠如」では《好き》グループが高い値を示した。したがって、意欲喪失要因は英語を好きな学習者と嫌いな学習者で異なる傾向を示すと考えられる。

上のような結果を受けて、各因子のそれぞれの質問項目においてもグループ間で差が出ているかどうかを調べるため、独立性検定を行った。その際、「強くそう思う」、「少しそう思う」、「どちらかと言うとそう思う」は「思う」として回答を合計し、「全然そう思わない」、「あまりそう思わない」、「どちらかと言うとそう思わない」は「思わない」とした。「どち

らでもない」という回答は除いて分析している。Table 4はグループごとの「思わない」、「思う」を選択した回答者数と、独立性検定結果を示す。当然ながら質問項目によって、「どちらでもない」を選択した回答者の数は異なる。質問項目ごとに回答の合計が異なるのはそのためである。

第1因子「困難・能力の壁」8項目の内、「文法が難しいと感じたとき」、「試験が難しかったとき」、「覚えることが多すぎると感じたとき」、「授業が難しかったとき」、「どうしてもテストで良い点が取れないとき」、「上達しているかどうかわからないとき」、「勉強する方法がわからないとき」の7項目で有意な差が認められた。いずれも《嫌い》グループにおいて意欲喪失の要因であると感じている回答者の割合が高いことから、「困難・能力の壁」と英語嫌いが深く関係していると考えられる。

第2因子「教師・環境」では、6項目のいずれにおいても有意な差が検出されなかった。これは尺度得点で有意な差が認められなかったことから十分予測できた。だが、「教員に対する信頼を失ったとき」、「クラスの雰囲気が悪いとき」、「教師の教え方が悪いと感じたとき」、「教師の態度が学生によって違うと思ったとき」、「教科書がつまらないと思ったとき」の5項目では、意欲喪失の要因であると考えている回答者が、両グループにおいて「そう思わない」と回答した者の数を上回っていた。Dornyei (2001) は、教師に関わるものが意欲喪失の最大要因であるとしているが、好き・嫌いを分ける要因の中で大きな位置を占めているわけではないようだ。

第3因子「自尊感情防衛」4項目の内、「間違っただけで恥ずかしい思いをしたとき」、「英語を話そうと思っても、うまく言葉が出てこなかったとき」の2項目で有意な差が認められた。下位尺度得点での差と同様に、4項目すべてにおいて《嫌い》グループで意欲喪失の要因と考えている回答者の数が《好き》グループのそれを上回っているが、「英語を話そうと思っても、うまく言葉が出てこなかったとき」を除いてすべての項目で意欲喪失要因と認めていない回答者の数が「そう思う」と回答した者の数を上回っている。つまり、いずれの項目も意欲喪失要因の中で大きなものとは言えないのかもしれない。ただし、頻度において大きな意味を持っているとは言えないということであって、実際、これらの体験をした場合にどれほど強い影響を及ぼすかは不明である。

第4因子「必要性・目的不明」6項目中、「自分は日本人だから、英語は必要ないと思ったとき」、「英語を使う場面がないと感じたとき」、「授業の内容に疑問を持ったとき(こんなことして本当に役に立つのかと思ったとき)」、「英語以外の勉強の方が大切だと思ったとき」の4項目で有意な差が見られた。この内、「自分は日本人だから、英語は必要ないと思ったとき」では《嫌い》グループ内で「そう思う」「思わない」間でほとんど差がなく、《好き》グループでは意欲喪失の要因とは思わないという回答者が大半であった。一方、「授業の内容に疑問を持ったとき」と「英語以外の勉強の方が大切だと思ったとき」では、《好き》グループ内でほとんど差がないのに対し《嫌い》グループでは意欲喪失の要因と考えている回答者が多数を占めた。ただし、質問紙の形式上、意欲喪失の要因と「思う」と回答しているように見えても、「疑問を持っている・他の勉強が大切だ」と思っているから意欲を喪失したのか、逆に意欲がないからそのように思うようになったのかはわからない。

第5因子「現実味欠如」の4項目中、「英語を話している自分に違和感を感じたとき」と

Table 4: 《好き》グループと《嫌い》グループの独立性検定結果

No.	項 目	《好き》 グループ		《嫌い》 グループ		カイ二乗値	p
		思わ ない	思 う	思わ ない	思 う		
1	試験が難しかったとき	69	56	22	88	30.553**	.000
2	覚えることが多すぎると感じたとき	48	7	12	103	27.425**	.000
3	学習する目的がわからないとき	37	91	29	76	.047	.828
4	クラスの雰囲気が悪いとき	39	82	43	52	3.838	.050
5	教員に対する信頼を失ったとき	22	94	24	71	1.215	.270
6	英語を使う場面がないと感じたとき	67	40	43	51	5.749*	.016
7	文法が難しいと感じたとき	61	57	17	95	34.187**	.000
8	試験が簡単過ぎたとき	86	26	96	6	12.610**	.000
9	授業が難しかったとき	51	56	18	87	22.486**	.000
10	教科書や教材の値段が高いと思ったとき	66	50	47	45	.698	.403
11	上達しているかどうかわからないとき	38	80	19	79	4.527*	.033
12	どうしてもテストで良い点が取れないとき	40	82	15	92	11.003**	.001
13	発音がうまくできなかったとき	65	44	40	53	5.555*	.018
14	教師の教え方が悪いと感じたとき	31	86	25	76	.086	.769
15	質問に対して満足できる答えが得られなかつたとき	37	72	33	60	.052	.819
16	授業が簡単過ぎたとき	74	36	86	12	12.248**	.000
17	教師におこられたとき	66	36	54	33	.141	.707
18	良い成績がもらえなかったとき	53	61	32	58	2.475	.116
19	英語を話そうと思っても、うまく言葉が出てこなかったとき	68	42	35	56	10.874**	.001
20	勉強する方法がわからないとき	37	74	11	92	15.758**	.000
21	欠席や遅刻をしてしまったとき	77	31	73	26	.154	.695
22	他の人(友達)が英語学習に対する意欲をなくしてしまったのを見聞きしたとき	90	24	60	32	4.849*	.028
23	自分は日本人だから、英語は必要ないと思ったとき	109	16	52	54	39.513**	.000
24	授業の内容に疑問を持ったとき(こんなことして本当に役に立つのかと思ったとき)	55	60	29	75	9.185**	.002
25	宿題が多すぎたとき	52	54	24	77	14.241**	.000
26	英語以外の勉強の方が大切だと思ったとき	61	53	31	70	11.388**	.001
27	毎日忙しくて、英語を学習する時間がないと思ったとき	44	61	25	71	5.598*	.018
28	外国人や外国の文化に興味を持てないと思ったとき	78	29	59	33	1.773	.183
29	英語を話す人で、どうも好きになれない人に会ったとき	89	16	73	16	.262	.608

No.	項 目	《好き》 グループ		《嫌い》 グループ		カイ二乗値	p
		思わ ない	思 う	思わ ない	思 う		
30	辞書を引くのが面倒だと思ったとき	70	44	38	61	11.233**	.001
31	自分の記憶力に自信がなくなったとき	58	55	29	67	9.527**	.002
32	間違っただけで恥ずかしい思いをしたとき	79	33	52	43	5.522*	.019
33	前で発表させられるなど、緊張したとき	71	40	49	47	3.528	.060
34	勉強しなくても誰からも怒られないと思ったとき	83	25	64	14	.739	.390
35	使える英語を学ぶには、お金がかかると思ったとき	73	41	56	35	.135	.713
36	結局、留学でもしないと英語は身に付かないと思ったとき	59	55	41	59	2.475	.116
37	英語を話している自分に違和感を感じたとき	90	19	52	29	8.306**	.004
38	一緒にがんばれる友達がいないとき	77	36	55	39	2.060	.151
39	教室の環境が悪い(暑い、寒い、狭いなど)と思ったとき	57	51	49	39	.165	.685
40	教師の態度が学生によって違うと思ったとき	42	78	38	65	.086	.769
41	教科書がつまらないと思ったとき	37	74	26	68	.770	.380
42	他の人の成績(テストの結果)が自分のものより良かったとき	78	25	58	32	2.939	.086

\* p &lt; .05, \*\* p &lt; .01 自由度 1

「発音がうまくできなかつたとき」で有意な差が見られた。前者においては、《好き》《嫌い》両グループにおいて、意欲喪失の要因と考えている回答者は少数であった。後者においては、《嫌い》グループにおいて意欲喪失の要因と考えている回答者数が「そう思わない」と回答したものを若干上回ったのに対し、《好き》グループではその逆であった。

第6因子「達成感・充実感欠如」の3項目中、「授業が簡単過ぎたとき」と「試験が簡単過ぎたとき」で有意な差が見られ、いずれも《好き》《嫌い》両グループで、意欲喪失要因と認めていない回答者が大半であった。しかし「意欲喪失要因と考えていない」という解釈と「そのような経験がない」、つまり「簡単だと思ったことがない」という解釈が可能であり、むしろ後者の解釈が自然であることは付け加えておかなければならない。

第7因子「努力回避」の3項目中、「辞書を引くのが面倒だと思ったとき」のみにおいて有意差が見られた。《嫌い》グループにおいて意欲喪失の要因と考えている回答者数が「そう思わない」と回答したものを上回っているのに対し、《好き》グループではその逆であった。嫌いなものは面倒でやりたくないのか、面倒だから嫌いなのか、因果関係は本研究の範疇を超える。

最後に、《好き》《嫌い》両グループで意欲喪失の要因として平均値の高かつたものを確認

しておきたい。Table 5は、全42項目中で平均値が高かった上位10項目をグループ別に示している。

Table 5: 《好き》グループと《嫌い》グループの意欲喪失要因上位10項目

順位	《好き》グループ (n=138)			《嫌い》グループ (n=120)		
	項目	平均値	標準偏差	項目	平均値	標準偏差
1	教員信頼喪失	5.239	1.766	暗記量多い	5.917	1.453
2	目的不明	4.957	2.096	文法難	5.600	1.647
3	教え方悪い	4.927	1.939	学習方法不明	5.483	1.495
4	雰囲気悪い	4.701	2.023	テスト得点悪い	5.417	1.601
5	教師の態度違う	4.572	2.144	授業難	5.383	1.681
6	テスト得点悪い	4.511	1.840	試験難	5.242	1.759
7	上達度不明	4.478	1.809	上達度不明	5.158	1.739
8	質問回答不満	4.471	1.793	教え方悪い	5.042	1.871
9	教科書退屈	4.445	1.786	宿題量多い	4.950	1.814
10	学習方法不明	4.406	1.758	目的不明	4.933	2.086

《嫌い》グループにおいては、上位7位までがすべて「困難・能力の壁」項目であることからわかるように、「困難・能力の壁」がもっとも大きな要因である。この点は、Dornyei (2001) の結果と矛盾する。一方、《好き》グループにおいては「教師・環境」6項目のうち5項目が上位10位までに入っていることから、彼の結果を支持することとなる。彼は学習者の意欲喪失について教師の責任が重大であることを主張しているが、英語が嫌いだという学習者にとっては、「難しい」、「できない」と感じてしまうことが大きく彼らの意欲を左右することは明らかである。したがって、授業に「わかる」要素が必要であり、この要素をバランスよく配置することで英語嫌いを減らそうと努めることが教師の責任と言えそうである。

#### 4. 結び

本研究では、自由記述回答をもとに42の質問項目を作成し、その回答を因子分析にかけて意欲喪失の潜在的要因を明らかにしようと試みた。また、被験者を《好き》グループと《嫌い》グループに分けて、各潜在的要因と質問項目のすべてにおいてグループごとに特徴が出るかどうかを調べた。その結果、《好き》グループにおいてはこれまでの研究が明らかにしてきたことと矛盾しないが、《嫌い》グループにおいては、「困難・能力の壁」が意欲喪失のもっとも大きな要因であることがわかった。

今回の調査はごく一部の学生に対して行ったもので、得られた結果は同様の学生層にしか当てはまらないことを付け加えなければならない。特に予備調査の対象は、関西の1短期大学の学生わずか30名であった。そのため、意欲喪失の要因を十分拾い出せたかどうかは疑わ

しい。また、その回答をもとに作成した質問項目も偏りが無いとは言いきれない。質問紙作成に際しては、先行研究の項目を使用するのが合理的な方法であったであろう。しかし、先例を参考にしながらも、自由記述回答を重視して選択肢を作成したのは、偏見を持たずに探索的に要因を浮上させようとしたからである。とはいえ選択形式の質問紙を採用する以上、研究者が想定した範囲でしか回答が得られないことは事実であり、この欠点を補うためには、予備調査のみならず本調査にも自由記述式の質問を採用するほかはないのかもしれない。これまで自由記述式の回答を分析するにはたいへんな労力を要したが、近年開発が進んでいるテキストマイニングの技術を生かせれば比較的少ない労力で回答の分析を行うことが可能となり、大量の定性データを研究に投入することも難しくなくなるだろう。

動機付けの研究同様、意欲喪失要因の研究は必ず困難にぶつかる。なぜなら、研究者はとらえどころのない心理状態を解明し、分類しようとしているからである。意欲喪失要因は無数にある。本研究で取り上げた42の質問項目も、目に見えない心の状態を解き明かすには極めて不十分であろう。しかも、その構造が単純ではないことは容易に推測できる。ある人は明確な1つの理由によって意欲を失うかもしれない。一方、ある人はその理由がいくつもあるかもしれない。「突然やる気を失った」という場合は、その理由を探索することも比較的容易なのかもしれない。だが、「いつの間にか意欲を失っていた」という場合、それはおそらく不愉快な経験が積み重なった結果であろう。そうなれば要因を特定するのは容易ではない。さらに要因間の因果関係はもっと複雑であろう。たとえば、困難を感じて意欲を失うのか、意欲がもともとないから困難なのか、この関係を解明するのははるかに難しい。そもそも本人が必ずしも自分の意欲とその度合いを認知しているとは限らない。また、意欲は時と場所によっても変化する。したがって意欲喪失要因を厳密に分類・測定し、意欲喪失の予防法を提案する道はまだまだ遠い。

意欲喪失要因の研究はまだ始まったばかりであり、これまでの研究が明らかにしてきたことは氷山の一角にすぎない。今後は新しい技術が応用され、様々な状況において異なる被験者を対象にした研究が行われることを期待する。

## 参考文献

- Dornyei, Z. (2001). *Teaching and Researching Motivation*. England: Pearson Education Limited.
- Falout, J. & Maruyama, M. (2004). A comparative study of proficiency and learner demotivation. *The Language Teacher* 28 (8), 3-9.
- Hasegawa, A. (2004). Student Demotivation in the Foreign Language Classroom. *Takushoku Language Studies* 107, 119-136.
- Tanaka, T. (2005). Teacher Influence on Learner Motivation. *Journal of Osaka Jogakuin Junior College* 35, 49-58.
- Trang, T. T. R., & Baldauf, R. B. (2007). Demotivation: Understanding resistance to English language learning: The case of Vietnamese students. *The Journal of Asia TEFL*, 4(1), 79-105.
- 上淵寿 (2004). 『動機づけ研究の最前線』北大路書房.
- 大岩昌子 (2008). 「フランス語学習者が学習意欲を失う要因を探る 習熟度別考察」『名古屋外国語

大学外国語学部紀要』34, 91-103.

辰野千壽(2009). 『科学的根拠で示す 学習意欲を高める12の方法』 図書文化社

**Appendix 英語学習に関するアンケート**

このアンケートは、みなさんが英語学習に対して感じている障害、つまずきの原因、不満を調査するために行っています。このアンケートが成績に影響することは決してありません。当てはまる数字に○を付けて回答してください。

質問 1 学年を教えてください。

- ① 1年生 ② 2年生 ③ 3年生 ④ 4年生以上 ⑤ 社会人

質問 2 性別を教えてください。

- ① 男性 ② 女性

質問 3 英語の学習は好きですか。

- ① 好き ② どちらかと言うと好き ③ どちらでもない  
④ どちらかと言うと嫌い ⑤ 嫌い

《英語学習への意欲喪失の原因について》

質問 4 どのようなときに、英語学習に対する「やる気」が損なわれると思いますか。下のスケールと照らし合わせて当てはまる数字に○を付けてください。下のような経験がない場合は、想像でお答えください。

- ① 全然そう思わない ② あまりそう思わない ③ どちらかと言うとそう思わない  
④ どちらでもない ⑤ どちらかと言うとそう思う ⑥ 少しそう思う ⑦ 強くそう思う

1. 試験が難しかったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
2. 覚えることが多すぎると感じたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
3. 学習する目的がわからないとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
4. クラスの雰囲気が悪いとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
5. 教員に対する信頼を失ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
6. 英語を使う場面がないと感じたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
7. 文法が難しいと感じたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
8. 試験が簡単過ぎたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
9. 授業が難しかったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
10. 教科書や教材の値段が高いと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
11. 上達しているかどうかわからないとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
12. どうしてもテストで良い点が取れないとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
13. 発音がうまくできなかったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
14. 教師の教え方が悪いと感じたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
15. 質問に対して満足できる答えが得られなかったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
16. 授業が簡単過ぎたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
17. 教師におこられたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦



18. 良い成績がもらえなかったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
19. 英語を話そうと思っても、うまく言葉が出てこなかったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
20. 勉強する方法がわからないとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
21. 欠席や遅刻をしてしまったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
22. 他人(友達)が英語学習に対する意欲をなくしてしまったのを見聞きしたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
23. 自分は日本人だから、英語は必要ないと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
24. 授業の内容に疑問を持ったとき (こんなことして本当に役に立つのかと思ったとき)  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
25. 宿題が多すぎたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
26. 英語以外の勉強の方が大切だと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
27. 毎日忙しくて、英語を学習する時間がないと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
28. 外国人や外国の文化に興味を持てないと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
29. 英語を話す人で、どうも好きになれない人に会ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
30. 辞書を引くのが面倒だと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
31. 自分の記憶力に自信がなくなったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
32. 間違っただけで恥ずかしい思いをしたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
33. 前で発表させられるなど、緊張したとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
34. 勉強しなくても誰からも怒られないと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
35. 使える英語を学ぶには、お金がかかると思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
36. 結局、留学でもしないと英語は身に付かないと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
37. 英語を話している自分に違和感を感じたとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
38. 一緒にがんばれる友達がないとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
39. 教室の環境が悪い(暑い、寒い、狭いなど)と思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
40. 教師の態度が学生によって違うと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
41. 教科書がつまらないと思ったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦
42. 他人の成績(テストの結果)が自分のものより良かったとき  
①-----②-----③-----④-----⑤-----⑥-----⑦

その他、項目にないものがあれば、具体的に教えてください。

( )

ご協力ありがとうございました。